

昭和三十四年七月二十三日第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第一〇二号）

續 記 念 號

慈

光

目 次

大悲大願のたのもしさ……………	花田正夫……………(1)
大経結びの段……………	福島政雄……………(5)
石見富士登山の記……………	三瓶徳英……………(8)
随感随想……………	榊原徳草……………(12)
祖父の形見……………	田中克巳……………(14)

第九卷

第九號

大悲大願のたのもしさ

花 田 正 夫

私がまだ岡山高校の生徒だった頃、或宗教雑誌で次の様なことが問題になったことがある。それは某仏教学者が

「ここに一握りの飯しかないとする。ところが二人の人が居て兩人ともにつきかり飢え渴いてゐて、それを食べなければ生きられないといふ様な、切迫しきつた時に臨んだとしよう。」

そうした時、聖者の道を説かれるN師は、そのすべてを相手に与へて無一物で行かれるであらう。又悪人救済を極唱されて、世間からも悪人の宗教とまで言はれてゐるA師は、相手を殺してでもそれを奪ひ取つて了ふであらう。

然し自分は凡夫であつて、聖者でもなく、また悪魔にもなりきれない。だから凡人の道としてその握り飯を半分つづに分けて食ふであらう」

かうした發表をした時、日露戦争で、それと同様の経験をした人があらはれて、「それは机上の空論である」とき

めつけるといふ様なこともあつた。

私はこれ聞いて、当時何と解してよいものか分らないので、池山先生をたづね、その事をお聞きした。すると先生は即座に

「君さう云ふことは其場に臨まないと何とも云へない」と答へられて、静かに念仏して居られたが、更に

「或は相手を惨殺してまで生きようとするかも知れないが、又調子がよければ、聖者の道を説く人よりも、もつとサツパリと相手にくれてやれるかも知れないよ……」と微笑せられながら言ひ添へられた。

これで私の不審はざらりと解けたのであるが、三十余年を経た今日もなほ耳の底に鮮かに残つて、さうだくと大いにうなづかされてゐる。

近角先生は「人生手放し」と常に仰せられて、如来の御はからひ一つを渴仰せられた由を、福島先生から承つてゐるが、池山先生のこの御答への出る根源には

『さればよきことも悪しきことも業報にさしまかせてひとへに本願をたのみまらすればこそ他力にては候へ』

との金句が、そのまま先生の御生命となつてゐるのをうかがへる。それがそのまゝ先生の『義なきを義とす』るお念仏であつた。

それにつけても、最近、私の病気を慰問して下さつた高山哲彦さんの話が思ひ併せられる。

それはもう二十七、八年も前の事で、高山さんがまた劉といふ旧姓を名告つてゐた、谷大の学生の頃であつた。不思議な機縁から信仰問題が苦になり、大煩悶に陥ちられた頃、池山先生を御自宅に訪ひ、種々と胸中の苦悶を訴へられたところ、先生はその一つ一つをうなづいて聞きとられた挙句に

「劉君、誠にお気の毒だけれど、私には君のその苦しみをどうしてあげる力もない」

と言はれて、静かにお念仏して居られた。その時は自分の苦しみの余り、池山先生、々々、と言ふが、頼りない先生だと思つて無為のまま帰つたけれど、近年になつて、先生の著書、「仏と人」などを熟読し、且は種々の人生問題にも遭遇し、五十の年にも近くなつて、矢つ張り先生の言葉が本当で、あれより外ないといふことがいよゝゝ知らされて来た。若しあの時、俺が引き受けた、何とでもしてあ

げるといふのであれば、それこそ頼りない話で、やがて行詰る。

「私にはどうしてあげる力もない」と申されつつ、ただ念仏される先生こそ、『歎異抄』第四章の、浄土の慈悲そのままの体現者であり、また第二章の、関東から、身命をかへりみずしてたづねて来られた同行に対しての「親鸞におきてはただ念仏して……」の聖人の御自督のそのままであつたと知らされて、今更の如く、自分の不明を取ちてゐると、斯うしたことを感慨深く物語られた。

ひとへに本願をたのんで、ただ念仏されるのは、仏智に照らされて、自利利他ともに如何とも為し能はぬ身と知らされるからである。仏の御手元で申せば、「唯称仏」とは「極重悪人」を見抜かれての大悲の至極である。この駄目な自性は信前、信後を問はぬ。煩惱具足、煩惱熾盛の身に、さるべき業縁次第で、如何なる振舞、即ち、善であれ悪であれ、身にそなへた宿業がさらけ出されるのである。このさらけ出される宿業の「兎の毛、羊の毛のさきにある塵ばかりも」聖人は限なく御照覧下され、そのままに撰めとつて下さるのである。誠に逃げやうもない、水も漏らさぬ周到な大悲の網である。然し斯う云つてしまへばその味が取り難いので、ここに二人の実例で教へを受けよう。

これは大分以前の事であるが、死刑囚として巢鴨の刑務所に収容された島田三郎氏は、幸に仏縁深くして、念仏の人となり、慚愧の心はおのづと外に現れて、彼に接する人々が皆感心する程であつた。

その当時、近角先生は死刑囚が念仏を喜び、打つて変わった信者と転ずるのを見られて、さうした人にせめて罪一等を減じて、無期徒刑として寛大な処置をして貰ふ道はあるまいかと、其旨を当局に申請せられた。

そこで当局としても種々に議つた挙句に、とにかく担当した検事が人物試験をすることになつた。

かくて、担当検事が島田に面会して

「君の手柄を見てみると、どうも人殺などする人間とは思へない。今まで罪に服してはゐるがそれはうそであらう。今日は本当のことを言つてくれ」

とさそひをかけた。すると、死刑確定者でありながらも、否、死刑確定者の故に、ヒョツとしたらばたすかるかも知れぬと思ひ込んで、この人は自分を救ひに来てくれたのであらう、と、自分の試されてゐるとも知らずに、

「私は今迄偽りの陳述をして居りました」と、意外な申出をした。

これを聞いた検事は、早速近角先生のもとに来て

「近角さん。あなたの立派になつたと云はれる島田も、

教務課長、藤井憲証師は出張先でこれを知り、早速ひきかへして山田を独房に訪ふと、すでに念仏に帰る平常心を取りもどしてゐた彼は、

「課長さん、申訳ありません。万が一にもたすかるかも知れぬと、身びいきしたために、とんでもない陳述をいたしました……」

と一切を打ち明けてわび入つたことがある。

この島田氏と云ひ、また山田氏と云ひ、すでに念仏懺悔の人と転じながらも、生への執着の強さに「ヒョツとしたら」といふ錯覚におちて、縁にふれては謊言をもするのである。これこそ「さるべき業縁の催せば如何なる振舞もすべし」とのかねての聖人の御言葉の動かすべからざるところである。然し斯く迷路に踏みこむ者が、再び念仏に立ち帰らされるのは、さういふ私共の妄念妄執の心のすみゝまでも、かねて御照覧下さつて、そのやうな身を、ことに憐み給ふ大悲大願がましますからである。

『久遠劫より今まで流転せる苦悩の旧里はすてがたく、いまだ生れざる安養の浄土は恋しからず候こと、よくよく煩惱の興盛に候にこそ。名残り惜しく思へども娑婆の縁へきて力なくして終る時、彼土へは参るべきなり。いそぎ浄土に参りたき心なき者を、ことに憐み給ふなり。これにつけてこそいよ／＼大悲大願はたのもしく、往生は決定と存

矢張り駄目ですよ。無実だと申し出ました、うそつきです」

と報告した。

先生は早速、島田に面会せられると、先生のお顔を見るなり彼は、涙を流しながら

「先生。私は仏様がどうかしてたすかる道はなからうかと、なみ／＼ならぬ御苦労をして下さるのに、自分と自分でそのお慈悲をはねかへして、たすからぬ方へおちこんでいきます。ナムアマミダブツ、……」

と、すでに懺悔の人と転じてゐた由である。

又、行李詰死体の犯人、山田憲氏もつまづきを縁として開法し妙好人と言はれるまでに念仏を喜んで居た。ところが最後の法廷の前に、彼の受持弁護士から、

「今度はいよ／＼最後の法廷だが、自分は力の限り君を弁護して、すこしでも罪軽かれと願つて来たが、君が何もかも、私が悪う御座いましたと、そのまゝ服罪するので弁護の余地がない。君も弁護人の心を汲んで慎重に最後の陳述をしてくれ」

と強く勧められた。そこで、ヒョツとすれば、たすかるかも知れぬと云ふ迷ひがおこり、最終の法廷で今迄の陳述を否認するといふ態度に出た。

このことは、彼を知る人々に大変な驚きを与へた。時の

じ候へ云々」

とは心憎いまでにその消息を信証して下さる慈言である。同時にこの聖人の御言葉を一度も耳にする者は、おそれ早かれ、そこに安住の場を恵まれずにはおられないのである。

なむあみだぶつ

白井成允

お慈悲が喜ばれるから、

お浄土が慕はれるから、

参れるのではない。

喜ぶべき心もさほど起らず、

参りたいとの念もさほど動かず、

ただ 病苦に責められ、

恩愛に泣かざるを得ない

煩惱の凡夫をこそ

如来 悲愍して招きたまふなり

こちらの力ひとつもなし、

全く如来のお慈悲一つなり。

大 經 結 び の 段

—— 大 平 和 の 世 界 へ ——

福 島 政 雄

サア丁度一年振りで皆さんにお目にかゝりますかと思ひます。実は昨年お話し申し上げたので大無量寿経を終つたつもりで居りましたところが、その時花田さんがいやもう一回話す必要があるといふその言葉が耳にとまつてゐました。成る程お経を開いて見ますと少し残つてゐるわけでございます。五悪段のあとでございますが、さういふことで今晩はそのあととところを処々拾ふやうにして申し上げて、それで大無量寿経のお話を一応申し述べたといふ事にして頂きたいと思つて居ります。

で、五悪段が終りますとそのあとにもう一度積尊が五悪段でお述べになつたと同じ事を、もう少し簡単に大変ねんごろに繰り返し仰せられてゐるところがありまして、そしてそのあとで、この娑婆世界では立派な心で立派な行ひをするといふことはなか／＼むつかしい、この世で齋戒清浄、身を齋め心を清めて一日一夜を送るといふ事が出来たなら、それは無量寿国で百年立派な心で立派な行ひをした

よりも尚勝る、それ程この世でいゝ心いゝ行ひといふ事は出来ない、むつかしいものであるといふ事を仰せられて、もう一つそんなことを繰り返されて、こゝに於いて善を修する十日十夜するといふ事は他の仏の国で千年もよい事をなすといふ事よりもなほ勝つてゐると、かういふ事を仰せられてゐる所があるのであります。

こんな所が私の心にとまつて居ります。實際、齋戒清浄と、自分の身を謹み心を清らかにするといふ様な事が一日一夜でも自分に出来るかといふ事を考へてみますと、一日一夜どころぢやない、一時間でもあるひは三十分間でも自分は出来てゐないのぢやないかといふ事を感じますのであります。こゝの所を積尊は見透して、實際この世の中に於いてこの世の衆生として立派な事はなか／＼出来ることではない、併しながらさういふ出来ないこの汝に真の心といふものを徹したい、非常にねんごろに教へ訓して善を修めさせて行き度いといふのが積尊の御心持であります。

そしてこの仏の御働きといふものが、この世の中を必ず立派な世界にせずんばやまずといふ御心持が、私共が非常に感じて読みますところのこの御言葉にあらはれて居ります。

『仏の遊履する所、国邑・丘聚化を蒙らざるは靡し。天下和順に、日月清明に、風雨時を以てし、災厲起らず、国豊に民安く、兵戈用ふること無く、徳を嵩び仁を興し、務めて礼讓を修す』

とこゝであります。こゝは私共大無量寿経を拝読致しまして非常に明るく感じますところの一つであります。仏様がおいでになるところが国も村もどんな丘の上でも山の上でも、仏の御教化を蒙らないところは無い。そして天下和順でありますから、天の下平和であり一切の人々は非常に純な心になつて、日も月も濁るといふ事がない、日月共に清く明らかになつて、風の吹くのも雨の降るのも丁度いゝ時に風が吹き丁度いゝ時に雨が降るといふ事になつて、災といふものが起つて来ない。そして国は豊かになり人民は安らかに生活が出来る様になつて、戦争をするといふ事は決してない。兵戈、戦ひの道具を用ふるといふ事はない平和の社会にしてしまふ。そして徳の高い人を崇び、そして情深い心を起して、よく礼儀正しく人にへり下ると。さう云ふ世界があらはれて来るやうになると、かう仰言るのであります。

これが何時も非常に明るく感じます所でありまして、實際私共この世の中といふものがこの御経のお言葉通りになればよいといふ事を念願と致しますのであります。實際皆さんもお感じになつて居られませうが、今日の様に武器と云つては、やゝ原子爆弾である、水素爆弾であるとかちらでもこちらでも爆発をやつてゐるといふ様な有様になつてをります。かういふ世界の有様を見まして、何とかしてこの人間がこんなひどい武器を用ひない、武器として用ひないやうになつて、世界がお互に和ぎ合ひ助け合ひまして、共存共栄といふやうな事にならないものか、積尊がこゝに仰せられるやうなかういふ世界が開けないものか、何とかして開けるに違ひないが今直に開けさうにないと思ひますのであります。

積尊が仰せられますのには、自分は一切の衆生、諸人民を丁度子供を父親や母親が思ふ以上に思うてゐると、それで何とかして五悪、人間の社会の五悪の姿といふものをすつかり絶えさせて、そして五悪から起つて来るところの五ツの痛みをすつかり消してしまつて、そして煩惱に焼けて来るといふ様な人間の心を、その煩惱をすつかり絶滅してしまつて、そして生死の世界のこの苦しみを抜いてやりたい、そのために仏としての徳を修めるのである、かういふ事を仰言つてゐるのであります。

これを私共がどう云ふ風に我が身に受け取るかといふ間

題になりますのであります。こゝで一才自由に私の心持ちを述べさせて頂きたいのであります。一体この地球上の人間といふものが今の様にお互に敵視してお互に敵同志の様になつて、まさかと云ふと非常な殺し合ひをしようかと云ふ様な有様になつて居ります。世界全体のみならず日本の国の内の事を考へて見ましても御承知の通りに始終闘争又闘争でありまして、鉄道の方の闘争なんか今日現に行つてゐるといふ様な有様でありまして、實際あつちを見て争ひ、こつちを見て争ひ、私なんか教育の世界に長く身をおかせて頂いて居りますが、この教育の世界といふところも大分この闘争気分になつて居るといふ様なことでありまして、あちらでもこちらでも問題が起つて居ります。御存じの通りであります。で、この闘争又闘争、或はお互が敵同志の様に睨み合つて居る、或は鉄のカーテンをおろしてゐるといふ様なこの世の中を、今から先何万年かかゝつて仏様の仰言るやうなさういふ平和の世界にするといふのであるか、さういふ事をお考へになる方もあるやうであります。併しながらそれではお釈迦様のこの大無量寿經に仰せられてあるところの御心持と一寸はつれるのぢやないかと思はれるのでありまして、釈尊の御心持ではさうでなくて、今この争ひだらけの、まかりまちがへば大逆殺をやらうかといふ様なこの人間の世界といふものに、大平和の心をめいめいの心の奥底に開きたい、その為にはどこまで

も弥陀の大悲の悲願を一切の人々の心の底に伝へるのである、その仏の悲願が心の奥に徹るのでなければどんなにお互に平和にしようといふ事を申し合せてみても何時も駄目になるのであつて、そんな事で一万年たつても五万年たつてもこの世の中といふものが平和になるのぢやない。お互の申し合せといふものは何時でも破る事が出来るやうなたよりの無いものである。さうでなくてどうぞこの地球上にありとあらゆる人々のせめて仏法の教を聞くといふ人々の心の奥に、この大悲の悲願、阿弥陀如来のお心持といふものが心の奥底に徹る様になりたい、このために自分は今この事を述べ説いてゐるのである、かう云ふ風に仰言つてゐる様に受け取れますのであります。

大平和を一万年三万年の後ではなくして、今この争ひばかりの様になつてゐるところのこの社会に住んで居りますところの私共一人々々の命の上に仏の眞の命といふものゝ滲み徹つて来るのを頂く、何処までも闘争気分ばかりを持ち続けつて来る故に喧嘩ばかりをしてゐる者を実に哀れに思ふ、どこ／＼迄もその喧嘩根性といふものをあはれむといふ仏の大悲がどうか徹るやうにと、そこから世界は變つて来るのである、そのまゝに變つて来るのである、一万年の後に變つて来るのぢやない、とかう云う事を仰言つて居ますやうに受け取れますのであります。

石見富士登山の記

三 瓶 徳 英

長い間の切望であつた、石見富士登山の目的を達した喜びと満足とは只今も消えては居りません。

その上、登山の副山物として有難い仏縁が顕現されたのであります。登山したのは昨年十月廿一日で、私が七十六の秋でありました。駿河の富士山へ登つたのは七十三の夏で、七合目近くから随分苦しかつたけれども八合目で泊つて、遂に頂上に登りました。私は老朽ながら比較的健康であります。之は十五の年から今日に至るまで、六十余年ほとんど毎朝冷水摩擦をやつてきたお蔭が多分にあると思ひます。

石見富士は海拔三百米足らずの小山ではありますが、頂上の一隅に地藏堂があつて、松が二三十本ある外、頂上全面岩石ばかりで、溶岩ではないけれども、此点は富士と呼ばれる資格があると思ひました。

頂上からの眺望極めてよく、江津、渡利の町の賑ひを眼下

に見て、東と南は郡内郡外の山々、灰色に濃く淡く近く遠く重なり、西と北は日本海の大海原に沿うて、岬々又岬の黛色長く続き、水天髣髴の広大無辺境に向ひ、暫時眺望をほしきままにして、地藏堂に入り拜礼し、弁当を食し終つた時、西側から七十前後の老婆が二人来られ、地藏様に香華、灯明、供物を捧げられましたので、あなた方は尊前を飾られたから、私がお経を読んでもよいかと申すと、それは願つたり叶つたりだと云はれ、私は「文類正信偈」を拜読しました。

人里離れた清閑の境地、この地藏尊の前に只三人限りです。登山の喜びに充ちに私は、

西方不可思議尊 法蔵菩薩因位中
超發殊勝本弘誓 建立無上大悲願
思惟撰取經五劫 菩提妙果酬上願
滿足本誓歷十劫 壽命延長莫能量
慈悲深遠如虛空 智慧円満如巨海

と譜に従ひ、声はりあげて読み、山上のこの位置が如来の慈悲と智慧との暖かき御懐のやうに思はれ、

清浄無碍光耀明 一如法界真身頭
發信称名光撰護 亦獲現生無量德

に至り、感極まりて落涙数行に及びました。

叡山、高野山の頂上で、伝教大師、弘法大師方は、さぞかし高声に読経なされた事であろう。身も心も澄み渡つて何等煩惱の汚なき聖僧の御姿は、尊嚴極まりなき仏格として拜まれ給うた事であらう、などと想念いたしました。

読経を終ると老婆は礼を言はれ、只今のお経は、お正信偈のやうにもあり、又違ふ様にもあるが、何経かと問はれたので、「文類聚鈔」の事を申し、あなた方は何宗かと問へば真宗と申され、時々参られるかと問へば、毎月一回参り度いが、欠ける事もあるとのこと。

此のお地藏様へ参れば如何な御利益があるかと問へば、どんな御利益か知らぬが、昔から靈驗高いお地藏様と聞いて居るので参ると申され、しばらく「文類聚鈔」のことなど話して袂を分つて下山しました。

私は「文類正信偈」を有り難く思ひ、毎日一度は仏書で拜読します。

「行」は称名念仏で利他圓滿の不行、万善円修の勝行と仰せられ、即ち絶対の善なる事を示されてあります。

「淨信」とは、利他深広の信心で、如来廻向の眞實信心なれば、顛倒なく、虚偽なし。この大信は往相についての御廻向で、威徳広大の淨信、長生不死の妙術なり、と仰せられてあります。

次に「然れば若は行、若は信、一事として、阿弥陀如来の清浄願心の廻向成就の賜ならざるはなし」と仰せられ、私の心に大慈大悲が徹到し給ひ、私の身に称名念仏が現はれ、働き給ふ絶対の世界が、真宗の行信であります。

和讃に

真宗信心の称名は、弥陀廻向の法なれば

不廻向と名つけてぞ、自力の称念きはるる
と仰せられてあります。

次に「証」に就いて、「利他圓滿の妙果」、即ち、他を利すること圓備満足する仏の地位なる事を示され、「利他教化地の果なり」と仰せられ、「然れば若は因、若は果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の廻向成就の賜ならざるはなし」と仰せられてあります。

この因果は、往生の因と、無上涅槃の仏果、即ち最高理想の極致、離苦得脱の境地、希望満悦の幸福、自覚覚他の

「文類聚鈔」は聖人八十三の御作で、此御年には数多き御著作があります。尊号眞銘文、淨土文類聚鈔、三經往生文類、愚禿鈔上下、皇太子聖德奉讃七十五首などであります。特にこの文類聚鈔は、御老婆心の上より、教行信証は大部であるから、縮少し、鈔出して、何人にも読み易くして、如来の眞実を御知らせ下さるために、御書き下さつたかと思ひます。

此鈔を拜読すれば、教行信証を拜読するのと同じだと思ひます。字数から見れば、赤表紙木版十七枚で、慈光誌の活字位にすれば二頁半にしか当りませんが、内容は広大無辺で、親鸞聖人直接の御説法であります。

さて無学老朽の私が本鈔を拜読した感想を老婆に申した二つ三つを記して、諸賢の御叱正を願ひ度いと思ひます。

先づ大体としては、末代濁世の私が仏の光明に照らされて、穢悪の真相を知らしめられ、仏の名号によりて力強く生かされる事は、如来の大慈大悲の願力廻向の賜であることは、疑ふ事の出来ない事実であります。

真宗の教行証について、「教」は大無量寿經の弥陀如来の凡夫救済の本願成就と、釈迦如来の出世の本懐であり、

活動等々、無量の功德が顕現する世界であります。

因果という事は、仏教の基礎であり、宇宙の真理であります。然れば如来廻向の因果により、開悟の疑なき真宗の妙教に遇つて絶対の幸福者としての満足と安心があるのであります。

次に「還相の廻向」に就いて「利他教化地の益なり」と示され「煩惱の稠林に入りて群生を開導し悲引する」と云はれ、更に「然れば若は往、若は還、一事として、如来清浄願心の廻向成就の賜ならざるはなし」と仰せられてあります。

往相の「信心正因、称名報恩」によりて、人生の行路を進み、還相の廻向によりて、有縁を悲引開導し得ること、往還自在なることは絶対の自由であります。

和讃に

往相還相の廻向に、もうあはぬ身となりせば
流転輪廻もきはもなし、苦海の沈淪いかがせん
と仰せられました。

斯く、「行信」に於いて絶対の善に導入せられ、「因果」に於いて絶対の幸福に充たされ、「往還」に於いて絶対の

自由を恵まれる。この広大なる恩徳を謝すべき道は、易行の大道を往く報恩の称名のみであります。

かかる如来の廻向を翼けてこそ人と生れし幸慶が感ぜられます。元来業苦の人生なれば、個人も、家庭も、国家にも種々の苦難が発現するけれども、これが救はれるのが弥陀他力の妙法なる証として、提婆、阿闍世の逆害、韋提希夫人の救はれ玉ひし、観經と涅槃經の御意が示されてあります。

和讃に

釈迦弥陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し

我等が無上の信心を、發起せしめたまひけり
と仰せられました。

我等、心昏く悪重く障多し、撰取不捨の真理を聞いて遅慮するなかれ。曇鸞菩薩言はく「菩薩の仏に皈依する相は、孝子の父母の仰に従ひ、忠臣が君主の命令に従ふ如く、動静出沒、我意我慢を交へざるが如し。」今報恩のために偈文を作るとして、第二の正信偈をお作り下さいました。第一の正信偈は聖人五十二の御著、教行信証の行巻の終りに出てをり、正信念仏偈と題せられました。第二の正信偈は聖人の八十三の御製作で、念仏正信偈と題され、正信と念仏とを置き替へられ、何れも六十行、百二十句か

隨

感

隨

想

大涼蔭樹

仏のことを大涼蔭樹と云ひ、樹王、大樹ともいふが、鳥崎藤村氏の隨筆の中に樹についての感想がある。私は今まで仏の「大涼蔭」の方はかり眼についてゐて、「樹」といふ方面には感じが乏しかつたやうだ。

藤村の説く所に感心したのは、この樹の方面についての感懐で、それは、樹といふものは、一ヶ所にヂツと立つてゐて、伸び、太り、二十年三十年、或は百年と、所謂一ヶ所に根を張つてそこから一步も動かないところである。故郷の山の懐しさも、川の思ひ出の深いのも、そこにあつて動かない所にある。動かないから亭々と茂り、洶々と流れて昔をしのび今を思ふことができるのである。

我々人間にしても、嘗々とはげみ、打ち込んで、それを十年二十年三十年と、根を下しその根を張つてゆけば、おのづからその人はその人なりに樹蔭をつくり涼風を容れ野鳥の宿りともなり旅人の息ひの場所にもなる。こちらへ植

ら成る偈文で、三部經と七祖聖教から出来て居ります。意味は同じ様に伺はれますが、処々の文言が異つてをり、特殊の有難味を感じる処が多くあります。

次で、吾人の救はれる本願の三心は、観經の「三心」、阿彌陀經の「執持名号」と同じく、天親菩薩の「一心帰命」の御心である事を証明せられてあります。穢惡汚染の私を、極まりなき如来の清淨眞実によりて、遂に如来位にまで引上げねば止み給はず。虚仮雜毒の私を如来の大悲廻向によりて、眞実清淨の証果に導き給ふ御喚声が、「汝一心正念にして直に來れ」の御声となりて私に届いて下さるのであります。

和讃に

信心すなはち一心なり、一心すなはち金剛心

金剛心は菩提心、この心すなはち他力なり
と仰せられました。

本鈔の最後の御文に

「常没の凡夫、願力の廻向によりて、眞実の功德を聞き、無上の信心をうれば、即ち大慶喜心を得、不退転地をうるなり。煩惱を断せしめずして、速に、大涅槃を証せしめ給ふなり」
で終つて居ります。

樹原徳草

へかへ、あちらへ植へかへして、転々としてその志を変へるならば、それこそ樹は枯れてしまふに相違ない。一ヶ所に黙々として根を下す、この一点に大樹たるの因子がある。法蔵菩薩の願行も、仏の吾等を一心に憐み給ふ御心も、「一子地の如し」といふのは、吾れ一人のために、吾れ一人のうちに、樹の動かない如く、吾にのみかゝつて、そこに思惟の根を張り、成就の枝葉を茂らせ大樹となつてくたさるのである。お念仏は、私に種子となつて播かれ、私をめぐりに根を下し、私の中に生長し、大涼蔭樹となつて下さつた。

親木を助ける

トルストイの書いたものの中にあるとのこと。そのことは、親木の根本に生長する芽生を見つけて、その芽生を取り去つたら、もつと親木を助ける位にならうと考へて、芽生を摘み取り摘み取りするうちに、親木も一諸に枯れてきた、といふ話。(鳥崎藤村「市井にありて」より)これはなんともないと云へばそれまでだが深い示唆をも

つた話である。大切なことが判つたり見出されたりすると、そのことだけに意識や行為が集中されて他を顧みなくなつたり、果はそれより外のものは捨ててしまつたりする。つまり自我といふ曲者は常に一つを押し立て、他の一切を顧みないといふこと、摘み取つてしまふことが思い当る節である。信仰々々と云つて居り乍ら、凡そ信心とは懸け離れた所へ出て居ることに気がつかず、他の信仰者の是非を思ひそれを口にし、自分をのみ生長させようとして他の一切を摘みとつてしまふのが私の常である。しかしながらそうした、是非善悪、正邪曲直、愛憎違順に猫の目の如く変化して定まりのつかぬ者が、どうなと捩り所を与へられ、それを同情の余りに呼び且つ名告り出で下さる御仏を南無阿弥陀仏と聞くと、日々に新に、その時その場に新しい御仏の阿弥陀如来さまに遭はせて頂くことである。これが唯一つの生甲斐であり死甲斐であるとするこぼせてもらふことである。

賢明に疲れる

これも藤村の「市井にありて」の中にある一節だが、国木田独歩が或る場所で藤村に「釣は愚劣な真似だ。しかし『賢明』に疲れてゐるものはその愚劣な真似を樂しむ」と云つたさうである。そして藤村は「あれはいかにも国木田君の言ひさうなことで、今だに私は折りにふれてあの言葉

を思ひ出す」といつてゐる。

「賢明に疲れて愚劣を樂しむ」。鳥崎藤村は、あれは国木田君の言ひさうなことだといつて、独歩氏の人柄を懐しみ思ひ出してゐるが、今これを読んで私などはフト心に、あゝ有難い目に会はせて頂いたことであると、お念仏が滯いてくる。他人や友人の方へ想ひが走るのになしに、あゝわしらは賢さうにばかり振舞つては難儀して居るが、御教へにあひ「愚身の信心におきてはかくの如し」とこれを、聖人直々の御声と承り、それを口うつしきゝれることゝに真似させてもらつてゐるのである。偉そうに又賢さうにばかりしてゐるのは、その身が元來愚劣だからなのだと言はされてゐるが、愚か者と聞きつゝ、「身」に滲みこんで「愚身」となりきれないで、何辺も賢さうにする。それが愚か者の証拠だと悟りきれない全くの愚劣な者であると言はれるのであるが、悟り切れる日は彼土に御約束下さつて今生に在つては、その悟り切れない煩惱具足の凡夫であり「瓦、石、礫の如くなるわれらなり」との聖人の悲語愛語に慰められて、腹の底から息がつけるのである。そして御浄土への旅、御浄土への旅、と常に心が勇むのである。

「愚劣を樂しむ」とは、只念仏してのみ可能であり、それは「賢明に疲れて」身体の硬はばつた者への「まことに悲傷すべし」との同悲同感のお念仏である。

祖父の形見

(一)

田 中 克 巳

私の母方の祖父は、香川大吉といつて、私の生家（丸亀市）から北東へ一里ばかりのところ、双子山といふ小さな山と、土器川とに挟まれた小さな部落（香川県綾歌郡川西村宇鍛治、現在は丸亀市に編入されたやうです）の百姓でしたが、なか／＼の篤信家として、郷党の人たちから尊敬を受けてゐました。私が今細々ながらも聞法的生活をさせて載いてゐますのは、この祖父と、その長男である伯父香川伝三郎に負ふところまことに大きいと存じます。

その祖父大吉の法話を、伯父伝三郎が筆記した粗末な綴りが「父の形見」と題して、私の手許に残つて居ります。長い間、私の本箱の底で、埃に埋もれて居りますが、このたび花田さんにお願ひして、「慈光」誌に載せて戴くことに致しました。

この祖父は、私の四、五歳の時にもう没くなつたので、私には殆んど記憶が無いのですが、私が生れたのを大へん喜び、とても可愛がつて、近在でも珍らしい位大きな鯛職りを立て、呉れたりしたさうです。それから五十年近くも後になつて、その法話が孫によつて活字にせられることも、深い因縁でありませうし、幾分でも愛撫に對する恩返しにもなりはしないかと思ふのです。伯父の「父の形見」は私に取つては「祖父の形見」でありませう。

(伯父の序文)

明治三十六年の頃より、折にふれて父の話を手帳の端に筆記し置きたるを、父死後三七日頃拾ひ集め、「父の形見」と題しありたるを、其の後数度書き直しの後、茲に

筆記したるものなり。

断続したる一語つつの綴り合せたるところも沢山にあり、なるべく当時の模様保存のため意味不測は闕するところにあらず。

もとより数年の時日を隔て、聴者をも異にしたれば、同じ意を幾度も書きたる嫌ひあれども其の都度の筆記なれば取捨を加へず。

大正四年八月十二日

傳三郎記

上頭に盲註を加ふ、他人をして見せしむればもとより嘲笑を買ふべしと雖も、唯我が一家の解釈に便せんと思ふのみ。

(この伯父の頭註は、便宜上本文の間に挿んで置きます。尙原文の片仮名も平仮名に改めました。)

(本文)

一、当流において、南無といふは帰命なりとある。その帰命といふのは、如来様の仰せにおしたがひ申すことゝるぢや。よそも南無観世音大菩薩、南無八幡大菩薩などと南無をいふけれども、元来八幡大菩薩に南無はなけれども、行者のかたより南無をつけるのぢや。何卒かうして下されと願ふのぢや。もし不憐に思召して、その願ひを叶へたときは、行者の願ひに仏様の方がしたがうたのぢや。願ひは行者の方で、したがふは仏の方ぢや。御当流で、は何卒悪

はたらくにあらず。あづかるとは助けらるゝ也、御助けく
ださる也。

一、帰命と發願廻向を一つにするはわるし。世間には帰命といふものを南無が廻向してくれるやうにすゝめる人がある。その人のいふのは、衆生は唯知作悪のどろ凡夫、とても難行すて、弥陀をたのむといふやうな善いことはようせぬ。が、たのむ信心が浄土まいりの因ぢやから、たのまねばならぬ。そこで仏がどうせよしたのまね機であるといふことをお見抜きなされて、南無がちやんと衆生にかはりて阿弥陀仏にむかひたてまつりて後生たすけたまへたとんでくれてある、たのむ機までも御成就なされてくれてあるゆへに、衆生はたのむ聞其名号と六字のいはれを聞かしてもらうてみれば、たのむもせぬなりがたしかに難行捨て弥陀をたのんだ御了解となり、丸々と仏にはからはれて、衆生は生れたきじのこれなりで、御助けにあづかり、どうもせぬなりが弥陀をたのみましたと立派に返事のできるのが他力御廻向の信心ぢやといふのぢや。かういふことにすると段々とその味ひがかはつて来る。これはわが讃岐だけぢやさうなが昔からかういふ一派の系統があつて、今にまだ全くはなくならん。つまりこの人は難行すて、弥陀をたのむといふ御心の御心がとられておらぬからぢや。難行をすてるといふのは、この私のむねがますこしはつきりと

人助けたまへは、法蔵菩薩の因位の大願ぢや。衆生往生成就せずば正覚取らじの御願ひが成就した正覚が南無阿弥陀仏ぢやから、大願が仏の方にある。私は唯造悪不善の衆生をかならず助くるの御勅命におしたがひ申すばかりぢや。南無とは仏の方にありては悪人を必ず助けるといふ御誓願ぢや。この誓願を聞かしてもらうて見れば、かゝる機までも御助けと安堵の信心となる。これが帰命ぢや。故に帰命といふことは、私の唯今のこの心なり、すこしもつくるはず、このまゝでお助けにあづかることゝるぢや。これが悪人をそのまゝ助くるの御勅命におしたがひ申すしたのぢや。他宗には誓願がないけれども、御当流は如何なるものもかならず助くるの御誓ひの故に、南無といふことが反対になるのぢや。かゝる悪機のもののが往生の大事を一定と安堵の心は其の体は悪人を必ず救ふの御まことが私の煩惱の心中に入つて下されたのぢや。これをお慈悲をもらふとも御信心をいたゞくともいふのぢや。つまり仏心が宿つて下されたのぢや。故に仏の誓願が私の御信心、仏の御勅命が私の安堵心、南無が即ち帰命ぢや。

(註) 仏の衆生にしたがふは大なる所作なり。衆生の仏勅にしたがふは更に衆生の所作にあらず。

どうもせぬなりに、この機のみ御助けにあづかるを仏勅にしたがふといふ。

御助けにあづかるといふことは助けてもらはうと機の功を

夜があけたらば、御聴聞が出来たらば、安堵が出来たらばとよくなつたらお助けにあづかると思ふが難行難修自力の心ぢや。それをふりすてなけすてとあれば、やれゝ大間違ひの方角違ひであつたと、なげすて、たゞこの悪人をどうあつても助けずばおかぬの御慈悲におしたがひ申して、このあさましき心中のなりにお世話に預るを難行すて後生助けたまへと弥陀をたのむと仰せられたのぢや。弥陀をたのむの御言葉を裏から伺へば、かはりどうしの凡夫の迷情をあてにするのではないぞよといふ心がある。弥陀をたのむといふことは私の方には丸々用事のないことで、ふかくたのむの深くとは、深き程ますゝ用のない味はひぢや。それを南無がたのんでくれたといふことにすると、たとひかはりにたのんでくれたにしても、たのむといふことは本来が仏にむかつてせねばならん大仕事となるではないか。

一、仏心といふことをよく味うてみねばならん。如来様のお心は、かゝる十悪五逆の悪人、必墮無間の罪人をどうでも助けねばおかぬといふ御心ぢや。我等はまあ前生からの親様のお手まはしで、宿善めでたくこの大法を聞かしてもらつて今はよろこんでるが、臨終の時に至りて萬に一つ疑が起つたらどうするぞ、もし火の車が迎ひに来たらばどうしよう。平生の思惑が違つて、狼狽へ出しはせぬかといふに、火車来現し、火の車が見えたら、往生はい

よ／＼一定ぢや。元来我身はたすかる機ではないのぢや地獄一定の機ぢや。その地獄行きを決定必定助くるの御本願ぢやから、落ちさへすれば往生一定ぢや。今もやつぱりそのとより、よ／＼なつて助かる御安心ぢやない。なんともなけりや往生一定、よろこばねば往生一定、わるけりや往生一定、腹が立ちや往生一定、火の車が見えりや往生一定ぢや。もうどうなつても往生は一定ぢや。こはれるものが始めからないから、こはれる氣づかひがない。金剛不壞の大信心ぢや。臨終に疑ひの雲が起つても、それは凡夫の迷想ぢや。私の迷ひのこの心はどうなりとなりしたい、すて、おくのよ、たとひいかなる善心おこるとも往生の助けともならず、いかなる悪心おこるとも本願の妨げともならず、どうでもよし。往生は願力のおかけさまぢや。よろこぶべきことをよろこばぬにて、いよいよ往生は一定と思へよと仰せられたは、まことに広大の仏心ぢや。凡夫の心なりやよろこばねば往生不定、煩惱が起りやこれではいかんと思ふは世間普通の道理ぢや。如来さまの超世の本願は、凡夫が御信心をいたゞいて以前とはかはりて如来様をも大切にするやうに殊勝になつたでおたすけではない。如来様にはそむいて／＼五逆十惡具諸不善のこの心をおたすけぢや悪けりやお助といふみのりは、法界中に又と再びあることでない。この大法に遭はしてもらうた仕合せとこの広大な

親様のお慈悲をよく／＼味うてよろこばねばならぬ。

(註) 願志の煩惱は火車来現なり。

こはれるものがないとは、了解にさらに機の所作を交へてをらず、唯本願あるのみ。

仏の誓願決定必定なる故に凡夫の往生亦決定なり、仏の本願金剛不壞なる故に凡夫の信心亦金剛不壞なり。

(未完)

蘇東坡の詩

谿声便是広長舌　ながれてやまぬたにのこゑ
山色豈非清淨身　そびえてきよきみねのいろ
夜来八萬四千偈　かぎりしられぬよはのうた
他日如何拳示人　かくとしめさんよしもなや

図書紹介

意譯 歎異鈔 池山栄吉著

発行所 京都市下京区油小路通花屋町上ル。
丁子屋書店。振替、京都一四五〇番。
定価 百五拾円。

池山先生・自序

私が嘗て歎異鈔の原稿を光演法主の御目にかけてゐたときであつた。丁度そこへ連枝大谷筆師が見えられて、この歎異鈔から更に邦語に訳されたら解り易い歎異鈔が出来てよからうと仰言つた。その折、私は心中ひそかにかわつた事をおしやると思つたのであつた。

歎異鈔が出版されてから、ドイツ語のわかる人からは、独文の方がはるかに解り易いと言ひ越されるのが常であつた。中には、いつそ現代の文体に直したものを添へたら、とまで言つて来る人があつた。日常歎異鈔を読みつけてゐる人でさへ、今まで解りにくかつたところも独文を読んで了解したと言つてよこす向もあつた。これらは皆私の甚だ意外とするところであつた。

私が念仏をまうされるやうになつてから歎異鈔を読んだのは何遍かしないが、読む度毎に、大方母をそばに招んだものだ。その折いつも私は思つた、母は説教などを聞きつけてゐるから、よくわかると思つて居るが、ならうことなら、もう少し解り易くかいてあつたらと。

母に対して何一つ孝行らしいことを、したことの無い私にも、平生歎異鈔と一緒に読んだといふことだけは、唯一の快い思ひ出である。今に尚歎異鈔を読む時には、母がそばに居られるやうな氣持がする。しかし断つて置くが、けふは一つ母の為に読んで聞かせてあげようといふしほらしい考えから読んだことは一遍もない。たゞ自分が読むついでに聞かせたといふまでのものであつた。

母の亡くなる数日前、意を決して歎異鈔のはじめの一二章を国語体に訳した。それは丁度母が法主台下から聞信院釈尼妙馨といふありがたい法名をいたゞいた時であつた。去年は亡き妻の記念として、歎異鈔を公にしたが、今年はまだ亡き母の記念としてこの「意譯歎異鈔」を出すことゝなつた。おもへば大胆極まる話で、なんのことはない盲者が平生歩きつけている道をいゝ氣になつて案内するやうなものだ。識者の嗤笑を免れないのは覚悟の前で、ただ之を縁として本文を読む人が一人でもふえれば、それ私の希望は足りるのである。

大正九年一月十一日。 岡山にて。

編集後記

初秋の涼風に身も心も爽かに、求道の心と呼びさまされる趣があります。

さてこの秋は、近角常観先生の第七回忌の御法要が、御郷里の、滋賀県東浅井郡湖北町字延勝寺、西源寺で九月に執行せられ、十二月には会館で執行せられます。先生に御縁の深い方々の胸に、先生は新らしく德音を垂れて下さることであります。

『肉身は滅すといへども、法身は常住なり』

第百号記念が本号まで続いて増刊増頁、青色青光、白色白光の無量無辺光を頂きました。物心両面に、陰に陽に御冥助下された御厚恩を謝します。

△「大経結びの段——大平和の世界へ」は福島先生の長年にわたる結びの御講話の第一回であります。この御講話を縁といたしまして靈鷲山上の大経の会座の德音がとこしへに私の心底にひびき続けることあります。私にとりまして大経の開眼を頂いたことを深くよろこんで居ります。いづ

れ大経講話の全体が出版出来る日を今日から準備させて頂きます。東京都調布市仙川町七九四、住。

△「石見富士登山の記」は三瓶老師が喜寿のお年で、登山され、そこで、念仏正信偈の深意に感泣せられての所感で躍る心で、浄土文類の大略をのべて下さり、文類への関心をひらいて下さいました。島根県大家局区内井田、住。

△「随感随想」の榊原さんの原稿は、私の病身を案じて下さり、すこしでも労を休めたいとの御心から頂いた原稿であります。大涼樹蔭にやすらがせて頂きました。

京都市右京区山田開町浄住寺

△「祖父の形見」田中さんの御家の宝を公開して下さいました。私共の気づかぬ以前から、結びに結ばれ、注ぎに注がれた仏心の善巧に哺まれて一声の念仏も申さして頂けるのであります。広島刑務所長として、服役者の父となり母となつて仏心に生きて居られます。私とは六高同期の学友であり信友であります。池山先生の歎異抄の講話を共に聴聞いたしました。広島市吉島町官舎。

御案内
九月は第二、第三日曜午後一時半より日曜例会。
十月は、第一、二、三日曜と読かせさせて頂くヨ定であります。

追記

福島先生から百号記念の特別原稿を頂きました。「祖聖を仰ぐ」と「晩年或る日の聖人」であります。憶へば、七百回忌の祖聖の忌を迎へますことの近いこと故、近角先生、池山先生の聖人讃仰の原稿と併せ、小冊子として頒布させて頂きたいと願つて居ります。聚墨生記

定価	一部	十七四(送共)
	半年	百四(送共)
	一年	二百四(送共)
編集・発行人	花田 正夫	
印刷人	本田 政雄	
発行所	慈光社	
振替口座	名古屋一〇四七〇番	

慈光 第九卷第九号 昭和三十二年九月十五日発行(毎月一回十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日 第三種 郵便物認可